

これでいいのかも知れない

ハンドボールのクラブ活動も続けた。

帰宅時、バスと電車の中では、僕はいつも疲れて、ぐったりだった。

クラブ活動が、おそく迄ある日の帰りは、人の少ない電車の中で、あの人のことを思うと、僕はいつもさびしい思いだった。

それでも、時々、クラブ活動のない日は、早く家に帰れた。その時は、よく、あの人を三条京阪の南口で見かけた。

その時、いつも、左手をあごに当てる様にして、右腕に学校かばんをかかえ、白い、南口の壁にもたれる様に立っていた。

あの人は、友達を待っている様子だった。

朝でも、帰りでも、あの人がいると、僕は、出来るだけ勇気を出して、必ずあの人の方に、僕に出来るかぎりの、強い視線を向けた。

しかし、あの人から見れば、単に、僕が、ちらっと目を向けただけしか感じていないかも知れない。そう思うと、僕の気持ちはいつも暗くなった。

しかし、この二ヶ月間で、僕が、男として、勇気を出して出来たのは、それだけだった。